
永遠の力を持った現実憑依者

ラグエス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の力を持った現実憑依者

【Nコード】

N0681M

【作者名】

ラゲエス

【あらすじ】

一人の少年の名前『阿木坂千歳』という
目が覚めると白い空間に居た。

すると、謎の声が説明してくれた。

どうやら、その少年の世界はブラックホールに飲み込まれたらしい。
そして、謎の声がその少年を何かの理由で選び、能力を持たせて（
？）別の世界に送り込んだ。

目が覚めるとユーノ（フェレット）の姿だった。
そこから、この少年はその世界に干渉する事が、

自由に好き勝手にする予定でもある。

第1話『始まり』（前書き）

このSSは別世界の能力、現実憑依、原作知識あり、最強設定の主人公です。

第1話『始まり』

俺の名前は阿木坂千歳。

なぜ千歳という名前なのかというと、

よくある話だ。

昔、なんちゃらなんちゃらが起こり、それを食い止めた英雄やらなんやら。

覚えてないから、説明は勘弁な。

それにしても、今いる場所がおかしいんだよ。

「ここどこなんだ？ 周りが白い」

どこ見回しても白い空間で広がっていた。

おそらくは終着点（入口の事）も存在しないだろう。

「まいったな。朝起きたらこんな所にいるし意味が分からない」

どうすればわからなくなった俺は寝転ぼうとすると声が聞こえた。

選ばれた。お前は選ばれたのだよ。

この空間に響き渡った声主を突き止める為、周りを見るが誰もいない。

まさかと思い、上を見るも誰もいなかった。

「気のせいか……」

お前は選ばれし存在。永遠の力、お前の知る知識を実現化、そして……選ばれた役目をくれてやろう。

「いや、ちよつと待てよ！ そんなものいらねえから家に帰らせろ！」

お前の世界は既に消えている。永遠の力を持って、世界を渡ってもらう。それがお前の役目。

「って人の話聞けよ……って俺の世界が消えてるだろ！？」

地球と月の間にブラックホールが発生し、周辺の惑星を全て飲み込んだのだ。

偶然、その空域を見ていた私は強大な萌え力を持つお主を見つけ、こちらに転移したのだ。

「も、萌え！？」

何を言い出すかと思えば、萌え力って何だ？

確かに漫画とかアニメ、ライトノベルは好きだが、それは一体どういう意味だ？

だから言っただけだ。お前は私に選ばれたのだ。光栄に思うがい。アニメの世界に行かせてやるのだから。……。

「これってまさかよくあるシチュレベルの現実憑依者か？」

私は忙しいのだ。詳しくは後で説明する。選ばれし者よ。さらばだ。

「いやいや、ちょっと待てよ！ 話がよく……」

そう言いかけた瞬間、かなりの眠気が襲って来て、耐えきれなかった俺の意識は闇の中に沈んだのであった。

一体、あの声は何者なんだよ……。

く????????

ようやく目が覚めた俺は起き上がると、体の構図が違つ事に気付いた。

「っ！？ なんで俺はユーノになつてるんだ!？」

つい叫んでしまった。

叫んでしまうのも無理はない。

だいたい、なぜユーノってわかつたのかって？

「隣に寝ているのはがいる。無印世界なのか」

慣れない体を動かし、どうやってたら人間に戻れるか頭の中を探ってみる。

すると、ユーノの情報が頭の中に流れてくる。

「うむ、なるほどね。って何これ……」

ユーノの情報を見ていたら、いきなり別の情報が一気に入り込んできた。

その情報とは何かって？

「本当に俺の知ってるアニメやゲーム、ライトノベルの全てが使えるんだな」

なのはの技はもちろん、某大戦や某魔王に某龍玉、某光の翼など。某光の翼つてのはあれだ、自称宇宙一天才科学者がいるや物質変換できる方。

「それにしても、よく寝てるなあ」

まだ俺はフェレットだぜ。

すうすうと子供の様に寝息を立てているのはを見ていたが。

「この姿でいるのもなんだし、叩き起してから俺の正体をばらすか」

俺の正体をばらすつてのはユーノが男だつて事をばらすだけ。

別に、俺の存在自体をばらす意味はないだろう。

「そうと決まれば」

俺は小動物の運動性を利用して、なのは首からぶら下がっている
レイジングハートを発動させる。

なのはじゃないと起動できないのに何で起動させれるのかって？

そういう能力が俺にあるとしか言えない。

すると、なのはのパジャマから魔導師の姿に変わった。

「よし、転移魔法発動」

場所はとりあえず、ユーノの記憶を利用してそこの公園に座標を
合わせる。

なのはと俺だけの小さな魔法陣を展開して転移した。

く近所の公園く

近所の公園に人払いの魔法陣を展開。

ベンチになのはを寝かせているが、起こそうか。

「なのは、なのは！」

「ううう、あともうちよっとってアレ!？」

バツと体を起こしたなのはが周りを見回す。

見回した後、不思議そうにしていた。

「なのは、ちょっと話があつてここに転移させてもらったよ」

「ええ!？ あ、そうなんだ……」

なのは一度驚いたが、何か納得したみたいだ。

「なのは、僕ね、実は人間の男なんだ」

「え、そうなの!？」

またもや驚いてくれた。

つてか、原作のユーノもばらすの忘れるなよ。

「じゃあ、証拠を見せるよ」

「う、うん」

俺は人間に戻るため、元に戻る呪文を起動する。

呪文と言ってもそう念じてるだけなんだけどね。

俺の体がフレットだった大きさがなのはよりちょっと大きめの身長になった。

「ふわあ、男の子なんだあ」

頬を赤くしているなのはがいた。

「ごめんな。何か騙したみたいで」

「ううん。別に良いよ。私も無理言ったから」

記憶の中を見ってみるとその通りだった。

ユーノを無理やりにもなのはがって強引にしたらしい。
原作とちよつと違うけどまあいいか。

「なのはは魔法の特訓した方が良いよ」

「うん。それは良いんだけど今何時なの?」

「今は5時ぐらいじゃないかな？」

「ええっ！？ まだ寝たいよ」

眠たそうに目を擦ってるなのは。

だが、ここで鍛えておかなければフェイトにどう勝つんだ？

「一応、デバイス起動させたからやっていくよ」

「うん」

よしよし、素直になってくれた。

俺の力を試すのにもちようどいいか。

「でも、ユーノ君はどうやって訓練させようというの？」

「ああ、僕はもう一つのデバイスでやるから」

「もう一つ！？」

「そう、ちょっと待ってね。これ出すの、レイジングハートより面倒だから」

「うん」

正確には今から作り出すんだけどね。

どんなデバイスにしようか。

うーん、よし！ 少しだけ実験型デバイスとしてやってやろう。

「我はユーノ・スクライア。レイジングハートを形とし、ある存在と存在を融合し、デバイスとなれ」

俺は融合するモノを想像しながら、空中に魔法陣を展開する。

その魔法陣からなのはレイジングハートと同じ形が出てきた。

すると、役目が終わったかのように魔法陣が消え去った。

空中に浮いているデバイスを左手で持ち

「我がデバイスの名をレイジング・エターナルとする」
<わかりました。マスターユーノ>

デバイスの宝石部分から返事がきた。

「それがユーノ君のデバイス……レイジングハートと同じなんだけ
ど」

「形だけはね」

だが、このレイジングエターナルのは特殊能力が存在する。
俺の融合させたモノとはネオ・グランゾン経由とアストラナガン経
由全てなのだから。

経由とはグランゾン、デイス・アストラナガンなどを含む。
ぶつちやけ、ブラックホールも撃てちゃうというデバイスだ。

「じゃあ、やってみようか」

「う、うん」

俺となのはは一定の距離を取り、デバイスを構える。
そういえば、なのはってデivainバスターって撃てたっけ？

「アクセルシューター」

なのはがアクセルシューターを100の光を出してきやがった。
って1000っ!？

この世界のなのはってインフレしてんじゃないの!？
それなら問答無用だ。

「なのは、避けられるものなら避けて見せる。ワームスマッシャー」

もちろん、手加減のワームスマッシャーだ。

小さな黒い穴が開き、その中に只の魔弾を打ち込む。

100つの魔弾を打ち込んだ後、穴は閉じる。

俺の行動に戸惑っていたなのはだが、真剣な目で俺を見てアクセルシューターを発射させる。

「100はコントロールが難しいだろ」

むしろ、今のものでは無理だろう、と背後にある大きな木を盾にする。

しかし、こちらに向かってくるなのはのアクセルシューターが周りに分散し、俺を囲んでいた、

「コントロールが出来てるだ！？ ならしよーがないな」

俺は笑みを浮かべながら指を鳴らす。

なのはの眼では見えない速度で100のアクセルシューターの前に黒い穴が出現し、魔弾を当てる。

当たった瞬間、爆発を起こす。

俺は転移魔法を利用して、爆発の衝撃を防ぐなのはの後ろに回り込みデバイスの先を背中突き付ける。

それを感じたなのはは驚きの声を上げ、

「うゝ、降参だよ」

「良い判断だね。もし降参しなかったらさっきの攻撃を直接与えたのに」

俺の言葉に青ざめたなのはは安堵の息を吐いてこう言った。

「降参してよかったあ。でも、今の何なの？」

「今の？　ワームスマツシャー、ワームホールを利用して、その中に最大10万の魔弾を入れ込み、360度攻撃や時間差攻撃もできる高度な魔法さ」

「そんなのがあったんだ。前はそんなの無かったのに」

「前？」

「うっん、何でも無いよ！！」

顎に手を添えて呟いたなのはに尋ねると、必死な表情で否定してきた。

前ってどういう意味なんだ？　とも考えたが、どうでもよくなった。どうせ意味もない事だ。

「そろそろ部屋に戻らないとお母さんに何言われるか」

「そうだね。僕はどうしようか」

「あ、そうだったね。ユーノ君、男の子だもんね」

フレットの姿を想像してたのはが苦笑する。

もう動物の姿にはなりたくないんだよな。

しーがない。デバイスをグランゾンに変形して、その中で住むか。そう考えていた俺なのだが、ポンと手を置いたなのはがこんな事を言いだした。

「じゃあ、お母さん達に理由を説明して泊めてもらおう？」

「何で？」

「ユーノ君、住む家ないんでしょ？」

「いやさすがに、男だとまずい」

「私に任せて」

任せてって言われてもなあ。

まあ、グランゾンに変形させた方が絶対良いのに。

そこなら好き勝手に干渉できて俺的には完璧なのだが。

満面の笑顔のなのはがそこまで言うなら仕方が無い、か。

「わかったよ。交渉は任せる」

「うん。じゃあ早速行こうか」

「ああ」

なのはに感謝を込めて笑顔を向ける。

すると、なのはの顔が赤面状態になり、小さい返事がきた。

「う、うん」

俺を先頭になのはの家まで歩いて行った。

第2話『ユーノとなのはが高町両親、おまけの兄説得とフェイトに
会う』へ

第1話『始まり』（後書き）

もう1つのSS（全ての終焉）を最優先とするため、こちらのSSの更新速度はちよつと遅いです。

たまに、速い更新の時もあります。

6月中はもう1つのSSを1回更新とこちらのSS1回更新予定。

第2話『フェイトと接触』（前書き）

時間軸が滅茶苦茶だったり、原作にはない展開があります。
逆行ネギより早く出来てしまった……。

第2話『フェイトと接触』

なのはの家に帰り、なのはが一生懸命に俺の事を説明していた。
両親からは僕を観察する視線が突き刺さるが、なのはの必死さに頷
いていた。

時間かかると思ったけど、あまりかからなかったみたいだな。

「ユーノ君」

あの様子だと説得が終わったのか？

嬉しそうな表情でこちらに戻ってくる。

「お母さん達が良いつて」

「あ、そうなんだ」

どうやって説得したのか聞いてみたいな。

……別にいつか。

今の俺はユーノだからな。

それに、この世界はなんたってアニメだし問題ない。

「これで一緒だね」

「でも学校には行かないよ？」

「ええ！？」

小学生からやり直すのは面倒なんだよ。

一応、元大学生なんだよな。

19歳だったからしょーがないが。

「わかったよ。でも私が学校に行ってる途中どうするの？」

「ジュエルシードを探すさ」
「ああ！ 手伝いたいなあ」

強請る様な声色で俺に聞いてくる。

「こつそりと出れば良いじゃん」
「そうだね」

早い返事だった。

「そういえば、今日は？」
「今日は学校あるよ」
「そうか。僕はこれで行くよ」
「う、うん」

両親に言ってから、外へ出た。

く森の中く

ここにジュエルシードの反応がした。
まったく現れる場所も違うから役に立たないんじゃないか？
そう愚痴りながら反応があった場所へ視線を向けると

「これは、発動する？」

木は普通とは考えられない早さで成長していった。
化け物の様な目や口が出てきた時点で、俺は森の中を囲むように

「結界発動」

俺の力で結界を作り出した。

別にデバイスやこの世界の魔法でやる必要はない。

ここを中心から100メートル範囲の紫色の結界ができる。
もちろん、普通の人ではわからない。

「上出来か」

うなづねと根を動かす目の前の化け物は声を張り上げる。

リアルで見ると、物凄く気持ち悪い。

吐きそうになってくる。

「ウオオオオオオオオオオオオッ！！」

「ああうるさいな。これでもくらっとけ」

デバイスを使おうとした瞬間、黒いマントを着た金色の髪をした女の子が背後から

「サンダーレイジ！」

攻撃していた。

化け物の木にヒットするが、あまり効果がないようだ。

雷属性は効かないのかな？

「何で……まあいつか。おい！ その金髪」

「あ、あなたは」

「俺はユーノだ。君は？」

「あんたに名乗る気はないね」

犬の耳をした女の子が隣に来ていた。
だが、

「私はフェイト、フェイト・テストロッサ」

「じゃあ、俺はユーノ・スクライア」

「気楽に自己紹介なんてしてる場合？」

うねうねと僕の方に根が飛んでくるが、デバイスを起動させ、後方に下がる。

「こいつを倒すか」

「どうするの？」

「見てなよ」

杖の先を木の化け物に向けて20発分の魔弾を撃つ。
撃った時点で既にヒットしていたがしぶとく生きていた。

「完全消滅させるか。マイクロブラックホール発射」

黒い重力玉をぶん投げると、またもやあまりの速度で木に当たる。
接触した事で、黒い塊が大きくなっていき、木もろとも飲み込んでしまった。

これにより木が消滅したのであった。

「……」

「……」

「……しまった。ジュエルシード1個消滅しちゃった」

フェイトとアルフが啞然とその光景を見ていた。

ふむ、出力をもう少し手加減してあげれば良かったかもしれない。
マイクロとはいえ、巨大化した木を軽く飲み込むのだから当然、ジ
ュエルシールドも消える。

その事を計算してなかったよ。

「これはこれでいいか」

と行こうとした所、2人の少女が道を塞ぐ。

「待つて」

「ジュエルシールドが消えたじゃないか」

「何の用？」

「あなたは魔導師？」

「違うよ。俺は……」

何だろうな。あの謎の声が永遠の力やら言ってたな。
ならば、俺の創った名称を聞かせてやる。

「俺は永遠なる者。縁があればまた会っただろう」

フェイト達を無視して、なのはの所に向かった。

数時間適当に歩いていると、なのはがいた。

「なのは」

「あ、ユーノ君、どうしたの？」

「ここでは駄目だ」

「公園だね」

二人でいつもの公園に向かった。

公園のベンチになのはが座り、俺は向かい合わせになる様に立つ。
とりあえず、木が大きくなって暴走していたという事だけ言ってお
こうか。

「ジュエルシード1個消滅しちゃった」

「ええええええええ！？」

予想した通りの反応、ありがとう。

「後、フェイトと名乗る子と出会った」

「フェイツ！？ えと、そうなんだ」

「勝負はしていないけど、ナノの方が上だと思う。火力は」
「どうなんだろう。ユーノ君は戦ったの？」

「戦ってない。逃げてきたからな。きっと挑んでくと思う」

「私、その子に会ってみたいなあ」

「じゃあ、ジュエルシード一緒に探すか」

「うん」

嬉しそうだった。

なのはとフェイトは親友だもんな。
ジュエルシードが1個無くなった。

これでどうなるかな？ 物語はどう動く？

「……………どうしようか」

「そうだね……ってあれは!？」

なのはが驚愕に満ちた表情で林の方を見ていた。
俺もなのはの視線の先を見ると、

「はあっ!？ 巨大な猫?」

「ええええええええ!？ ちょっと早すぎだよお!？」

「何が早すぎなの?」

「な、な何でも無いよ!？」

なのはが俺の質問を慌てて無かった事にさせた。
本当に何なんだよ。

「で、どうする?」

「どうするって言われても止めるしか」

「まあ、ジュエルシードが原因なのは見ての通りか」

「そうだね」

すると、なのはがデバイスを起動させて、魔法少女の姿になる。
レイジングハートを左手で持っている状態。

「いくよってユーノ君?」

「どうしたの?」

「ユーノ君はデバイス展開しないの?」

「無くてもどうとでもできる。それに、なのはだけで充分だろう」
「そうなんだ。じゃあ私、行ってくるね」

頷いたなのはが巨大な猫の方に飛んでいった。
デバイスはあくまでおまけだからね。

全グランゾン、アストラナガン経由の全部武器を使用できる上、
なのは世界の全魔法を使用できる程度のレイジング・エターナルか。
原作崩壊する気がする。

「あはは、ん？ あれは」

巨大な猫がさらに大きくなっていく。
おかしいなあ。俺の眼の錯覚か？

「何で推定30メートルもあるんだろうか？ なのは魔法を吸わ
れてるのか？」

状況を見ると、
なのはのアクセルシューターが猫にヒットした途端、ちよつとづつ
大きくなっていった。
あのままではどうみても無駄な気がする。
成長させてどうするんだ？ なのは

「行くか」

とりあえず、俺は巨大な猫の方へ向かった。

「ミャ~~~~~ン」

「くっ！ 魔法が吸われてる？」

「そうみたいだな」

「ユーノ君、どうしよう」

「ジュエルシードを狙うしかないね」

「ジュエルシードは猫さんの胃袋の中だよ？」

猫さんってなのはの性格、変わってる気がする。

「魔法じゃなければ攻撃は可能か？」

「私、魔法しか使えないよ？」

「空間破壊できる魔法とか無いの？」

「あ、あるけど……今のままできるかどうか」

「あるんなら使っしかないと思う」

スターライトブレイカーを撃てるのか。

俺の知ってるなのは世界とは大分違うようだ。

まあいい。俺が対処してもいいが、ジュエルシードを減らす訳もない。

「じゃあいくよ」

なのはがレイジングハートを構える。

「スターライトブレイカー！！」

なのはの声と共に解き放った。

魔法が猫にぶち当たった瞬間、

「レイジングハート、ジュエルシードナンバーランダム、封印開始」

ランダムって何だよ……このプログラム、原作にあったっけ？

なのはのデバイスがジュエルシードを引きづり出した。

胃袋の中にあつた物体を透過させて回収するなんてな。

俺は今後のなのはがどこまで強くなっていくのか楽しみになった。た。

「ユーノ君、ジュエルシード回収したよ」

なのはの手には、ジュエルシードがあった。
へえ、こんなに小さいんだあ、と実物を見た俺は感動する。
ほら、アニメだと美化されてる可能性があるだろ？
目の前のなのはもフェイトもかわいいから別に良いけど。
あくまでかわいい、だからね。

「ユーノ君が持つてる？」

「なのはが持つてなよ」

「じゃあそつするね」

レイジングハートの中にしまい込んだ。

「さてと」

「待つてください」

「え？」

「あれは……フェイトか」

ここは林の中だから木があちこちに立ってる。
一本の木の上にフェイトとアルフがいた。

「フェイトちゃん!？」

「っ……もしかして、なのは？」

アレ、もうお知り合いだったのですか？
なのはと共に行動してなかったからもう会ってるかもしれない、と
解釈した。

「フェイトちゃん、どうしてここに」

「ジュエルシードの回収かな？ ユーノ」
「何？」

「……何でも無い。それよりなのは、ジュエルシードを渡してほしい」

「駄目だよ」

「！？ どうして……」

「だって、危険だもん」

「全部集めればお母さんの夢は叶うの」

全部つてもう全部は無いんだけど。

「一つだけ聞いていい？」

「何？」

一応、確認だけはしとかないとね。

なのはの実力も今日だけでフェイトと会う回数も多いし。
共通点だけは見つけないと。

「君の母親の名前は？」

「プレシア」

「そっか。……なのは」

「え？」

「ジュエルシード、ちょっと貸して」

「うん」

なのはからジュエルシードを受け取り、俺の魔力を注いでやる。

なのは達に感知できないよう気配を遮断して、なのはとフェイトの間
に投げた。

すると、ジュエルシードがピタッと止まる。

「それあげるよ」

「ユーノ君!？」

「なのは、ジュエルシードを集めるの大切だけど、フェイトを助けてあげないと」

「そ、そうだね」

だが、俺やなのはの隙を狙ったかのように、アルフが真ん中にあるジュエルシードに触れる。

正確には回収しようとするんだけど。

ジュエルシードが光り出した瞬間、捕縛魔法陣でアルフが捕縛された。

「何だこれ!？」

「アルフ!」

「フェイト、大丈夫だよ。こんなの」

力を込めて魔法陣を剥がそうとするが無駄だ。

その捕縛魔法陣はヴォルクルスの呪縛とほぼ同じだ。

「ユーノ、アルフを放して」

フェイトの言葉を無視して、アルフの前に瞬間移動する。

「フェイト、条件がある」

「条件?」

「うん。全部で三つあるけど聞く覚悟は?」

「わかった」

「一つ目、ジュエルシード回収をなのはと共に行う事。

2つ目、フェイトが回収したジュエルシードはフェイトの物だけど、

なのはが回収した物はなのはの物だ」

「……わかった。3つ目は？」

「それは今後伝えるよ」

「今じゃ駄目なの？」

「今は何もないから」

「うん。それでいいよ」

交渉成立したら、捕縛魔法陣を解除した。

アルフが俺を睨んでいた。

あんな事をされて当然か。

「ユーノ、あんた後で覚えてなさいよ!!」

「事象の地平面に追放されたかったらどうぞ」

「何よそれ……」

アルフが疲れた表情で額に手を当てる。

俺の言ってる事で疲れてるのか、俺と話すのが疲れるのかどっちだろうか？

「それよりも用は終わりじゃないの？」

2人はまだ帰らないでいる。

どうしたのかな？

「なのはと行動するんでしょ？ だったら」

「そうか。なのは！」

「……え？ 何、ユーノ君」

「フェイトとアルフをなのはの家に居候」

「フェイトちゃんと!？」

かなりの声で驚き叫ぶなのは。

「女の子だから簡単に説明できるでしょ？」

「うん。よろしくね。フェイトちゃん、アルフさん」

「なのは」

「ふう……」

なのはとフェイトは仲良く握手していた。

その光景を溜息を漏らすアルフ

これでいいのかなあ。フェイトをこちらの陣に引き入れるのが目的でもおかしいな。こんなにあっさりと成立する訳ない。

「じゃあ、なのはの家に戻るか」

「うん。いこ、フェイトちゃん」

「うん」

なのはとフェイトは先になのはの家へ向かった。

この場に残った俺とアルフは気まずい空間になる。

「ねえ」

「アルフ？」

「あんた、強くなつてない？」

「何を言ってるの？」

「ふうん、なるほどね。だからか……」

アルフが顎に手を添えてうんうんと頷き、自己完結していた。

何を言ってるのかさっぱりだ。

でも、なのはの『前』とこの会話は関連しているかもしれない。

「私もそろそろいくか」

「あ、俺も」

完全にユーノのくせに俺になつてるけど気にしない。
あくまで俺は俺と証明するために。
俺達は目的地へ向かった。

「なのはの家」

両親には既に話して成立しているようだ。

聞いてみると、なのはの右隣の部屋なんだそう。

ちなみに俺の部屋は左隣だったりする。

つか、なのはの家がアニメよりも広いのは気のせいですか？

「アルフ、ここだね？」

「うん。フェイトって書いてあるし」

なのはの字でフェイトちゃんハートって書かれてる。

ドアをノックすると、ドアが開いて中に入るよう勧められた。

中に入ると、何時の間にか荷物が転移魔法で出てきた。

誰かに見られたらどうする気だ？

そう思いながらも壁際にもたれて座る。

「なのはのお母さん、優しいね」

「うん」

「2つベットあるのは？」

「私とアルフ」

「一緒に寝てないんだ」

「そんな年齢じゃないし」

「うん」

女の子同士は別に良いんじゃないかな？ 百合的な意味で。

アニメの3期でなのはとフェイトとはやてが……っていうシーンがあったようななかったような。

忘れちゃったけどどうだったかな。

頭の中でそんな事を考えていると、なのはが妙な事を言い出した。

「で、これからなんだけどユーノ君とフェイトちゃんは学校に行く事になったから」

「ちよつと待つてよ！ 何で俺が学校に」

「だってお母さんが行かないならこの家から追い出すとかいうんだもん」

「それなら出た方がマシだ」

「ちなみに手続きは今日のうちに完了してますだつて」

あまりの勝手な出来事に、俺はボタンと地面に寝転がる。
でもなんか楽しそうな表情のなのはがいた。
何が嬉しいんだ？

「なのは、何でそんなに楽しそうなの？」

「だってユーノ君と学校に行けるし」

「学校に行っても俺、友達とか作る気ないよ？」

「大丈夫だよ。私の友達を紹介してあげる」

なのはの友達つてのはまさか、アリサ・バニングス、月村すずかですか？

なのは世界に居るんだし、ちょっと会ってみたいなあ。

会うためにはなのはに紹介されなければいけないな。

学校行かなくても会えるかもしれないけど、ジュエルシードや色々やる事あるから学校の方が良いか。

そんな事を考えていると、あの声が聞こえた。

その2人に会い、萌え力を高めよ

そんな一言が脳に響いたのはいいが、萌え力って何だよ！？ 後、心読むなよ。

そういえば、俺が萌え力なんちゃら言ってたな。

今は謎の声の言う通りにするか。聞かなかつたらどうなるかわからん。

「……仕方ない。いくよ」

「ユーノ君と学校生活かぁ。楽しみになってきた」

「うん、そうだね」

制服とかきつと俺の部屋に行ったらあるんだろうなあ。

学校行くぐらいなら出て行きたいけど、付いてこられるのも面倒だ。でもさ、楽しそうに笑ってるのはとフェイトを見るとまあいっかって気持ちになる。

あまり自由に行動できなくなったって事は仕掛けだけはしとかないけない、か。

「僕は自分の部屋に戻るよ」

「夕御飯になつたら言っね」

「うん」

なのはが頷いた事を確認した俺は、フェイトの部屋を出て自分の部

屋に入る。

部屋に入ると、綺麗に掃除されていた。

「やっぱりあるのか」

ハンガーで掛けられた小学生の制服がポツンとあった。
溜息を吐いた俺はベットに体を預けるように寝転がる。

「この分だと八神はやてと会つのも時間の問題か」

もはや原作と違うのか、修正力で出来事だけを同じにされるのか？
それは誰にもわからない。

「スパロボ系の能力を使えるのは良いけど、オリジナル系しか使えないのかよ!」

頭に思い浮かぶのは全部オリジナル系の能力ばかりだった。
どこにもロムさんの技や冥王の技などなかった。

「ああ、ヒートエンドとか言いたかったなあ」

そんな愚痴を漏らしていました。

n
e
x
t

第3話 『学校転入となのはの友人に会う』へ

第2話『フェイトと接触』（後書き）

アニメだとこの話になるんだろうか？

時間軸自体が狂ってるので気にする必要はないです。

なのはとフェイトとアルフは…… 者です。

感想などお待ちします。

次の更新、3話目は全ての終焉36話公開後になります。

設定『現在2話まで』（前書き）

設定だけなので、飛ばしてくださっても構いません。
短いのはまだ2話だから。

設定『現在2話まで』

1話に出てきた謎の声は神様ではありません。
なぜ、この少年が選ばれたのかわかります。

永遠の能力：不明。物語の鍵

ユーノ・スクライア
・阿木坂千歳

元19歳の大学生。現在、ユーノになっている。

元の世界が消滅してるため、元の世界に戻る事が出来ない。

能力

スパロボ・オリジナル系の能力。（今の所、デバイスの能力のみ）

ドラゴンボール系の能力。（使える能力は不明）

デイスガイア系の能力。（使える能力は不明）

天地無用！魍皇鬼の能力。（使える能力は不明）

永遠の力（何一つ不明）

使った技。

ワームスマッシャー

マイクロブラックホール

紫の結界

デバイス：レイジングエターナル

見た目はなのはのレイジングハートをベースにしたデバイス

名前は謎の声の言っていた言葉を入れただけ。
グランゾン・アストラナガン系の能力となのは世界の全能力を使える。

・高町なのは

デバイス：レイジングハート

使える技。

アクセルシューター

スターライトブレイカー

実は 者で、魔力も原作以上の質量を持つ。

ユーノに対しての態度が女の子？みたいな感じ。

・フェイト・テストロッサ

デバイス：バルディッシュ

使える技。

サンダーレイジ

なのはと同様。

ユーノの提案？で、なのはの家に居候する事になった。

・アルフ

フェイトの使い魔で、 者。

ユーノに対して妙な態度を取る事になる。

設定『現在2話まで』（後書き）

次の更新（第3話）は全ての終焉36話更新後です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0681m/>

永遠の力を持った現実憑依者

2010年10月20日09時29分発行